

美濃陶磁歴史館だより



連続 うちんたあのお宝、なんやね？

コラム

第18回 曾木町で東濃地域初の暗文土器を発見

暗文土器とは

暗文土器は、金属製の食器を模倣した飛鳥・奈良時代の土器のことです。金属製品は大変貴重で、限られた階層しか用いることができなかったため、その代用品として作られました。金属製品の器形や細部の形状を模倣するだけでなく、金属製品の質感を再現するために、ヘラで表面を磨いたり、内面にみられる光沢を文様（暗文）で表現しています。非常に良く精製された粘土を使用して、赤褐色に焼き上げています。7～8世紀にかけて、飛鳥・藤原・平城京といった政治・文化の中心地や、地方の古墳や官衙（公的施設）、寺院跡などで見つかっています。生産開始当初は、畿内（奈良、京都）で作られていましたが、7世紀後半以降になると需要増加に伴い、地方でも生産するようになります。

暗文土器が発見された

曾木上田遺跡とは？

曾木上田遺跡は、曾木支所のすぐ西側に位置する遺跡です。古代の土師器

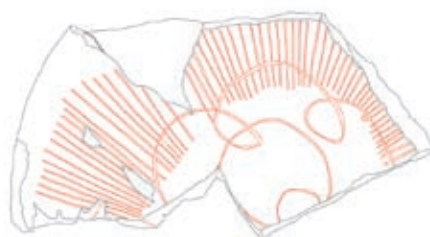
や須恵器を主体に、縄文土器や中世の山茶碗などが採集されています。周辺には、狐塚古墳や近世の窯跡、寺社など各時代のさまざまな遺跡が点在しています。これまでに発掘調査は行われておらず、平成29年度に初めて発掘調査を実施した結果、東濃地域初の暗文土器（8世紀前半）が発見されました。東海地域では三重県（津市、松阪市）で作られていたことが明らかとなっていますが、残念ながら本遺跡の暗文土器は、どこで作られたかは不明です。今後の研究の進展が待たれます。

曾木上田遺跡で暗文土器が出土した背景には、この遺跡の立地が大きく関係していると考えられます。本遺跡は古墳時代から機能していた中馬中街道と中馬街道という2つの街道を結ぶ中間点に位置します。このため、交通の結節点として重要な場所であっただけでなく、旅人の休憩所兼宿泊施設の布施屋（仏教寺院の救済施設）であった可能性があります。そして、この地を管理していた人物は、狐塚古墳の被葬者の子孫にあたる一族であったと考えられます。



◀内面の写真

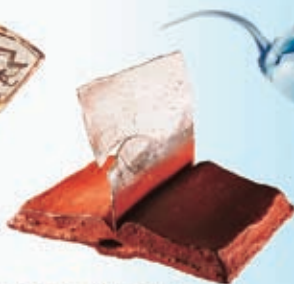
内面の図面▶
(赤線が暗文)



◀曾木上田遺跡と街道

企画展 のご案内

美濃陶磁歴史館
(☎ 051245)



現代のオブジェが
桃山の織部と
響き合う！

Revol
ution

2022年
5月21日(土)
8月7日(日)



土岐市美濃陶磁歴史館
Toi City Historical Museum of Mino Ceramics